

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心理学 ）	氏名	柏原 志保
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">他者行為の観察による行為の虚記憶の生起過程 — 記録時の要因の観点からの検討 —</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 宮谷 真人</p> <p>審査委員 教 授 中條 和光</p> <p>審査委員 教 授 森永 康子</p> <p>審査委員 准教授 中尾 敬</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>実際には経験していない出来事を経験したものとして思い出したり、実際とは全く異なる形で思い出したりする現象を虚記憶とよぶ。虚記憶の中でも、他者がある行為を行う様子を観察することで、自身は行っていない行為を自分が行ったと誤って想起するのが「他者行為の観察による行為の虚記憶（observation inflation, 以下 OI）」である。本研究は、OI への関与が想定される要因として、行為への注意、行為スキーマの活性化、運動シミュレーション、および観察者の個人特性を取り上げ、それぞれが OI に及ぼす影響を調べることにより、OI の生起過程を明確化しようとするものである。</p> <p>論文の構成は、以下のとおりである。</p> <p>第 1 章では、研究の背景と目的が示されている。虚記憶および OI に関する先行研究を概観し、研究の意義として、OI の性質を知ることが、実演効果（行為を実演することが記憶を促進する現象）の解明や、行為の虚記憶を抑制すべき場面で生じないようにする対策などに繋がることを挙げている。しかし OI は、行為主体が自分か他者かというソースモニタリングエラーが生じた結果生起する現象であると想定されるものの、どのような特性を持つ観察者が、どのように他者行為を観察し、どのような処理が行われた結果行為の虚記憶に至るのかの検討が進んでいないのが現状である。これらを踏まえ、本研究の目的を、行為の観察時、すなわち行為を記録する段階に関わる複数の要因が OI に及ぼす影響を検討し、OI の生起過程を明確化することであるとしている。</p> <p>第 2 章では、観察の仕方に関わる要因として、行為そのものへ注意を向けるかどうか OI に与える影響を検討している（研究 1）。研究 1 には、大学生 54 名が参加した。典型的な OI 研究では、①参加者に単純な行為を表す行為文を呈示し実演または音読を求める（行為課題）、②他者が行為を行う様子をビデオで観察する（観察課題）、③2 週間程度経過した後、行為文について行為課題で実演したか音読したかの判断を求める（ソース再認課題）、という手続きをとる。ソース再認課題において、行為課題では実演せず観察課題で観察した行為について「実演した」と回答した割合が OI 生起量となる。研究 1 では、観察課題において行為者に注意を向けて観察するよう教示する注視条件と、行為者以外の刺激</p>			

に対する判断を求める非注視条件を設けた。両条件を比較したところ、OI 生起量は、非注視条件より注視条件で有意に大きかった。

第 3 章では、観察時の表象生成に関わる要因として、他者行為の予測可能性が OI に与える影響を検討している（研究 2）。観察課題において、行為を観察する前にその行為を予測できるような情報を与える予測容易条件、実際に観察する行為とは別の行為を予測させる予測困難条件、行為に関する事前情報を与えない予測なし条件を設定し、大学生 20 名の OI 生起量を比較したところ、事前情報により活性化した行為スキーマと実際に観察した行為が一致しないと OI が生起しないことが分かった。

第 4 章では、他者行為観察中に脳内で生じていると想定される運動シミュレーションと OI 生起量の関連が検討されている（研究 3）。観察課題遂行中の実験参加者 20 名の脳波を頭皮上から記録し、運動に関わる脳波成分の一つであり、運動の実行・観察時にパワーが減衰する性質を持つ mu 波を分析した。運動シミュレーションの指標となる mu 抑制と OI 生起量の関連を調べたところ、運動シミュレーションが強く生じる人ほど OI が生じやすいことが示唆された。

第 5 章では、OI の個人差と関連する個人特性として自発的脳活動（特定の刺激がない安静時に測定される内因性の神経活動）を取り上げた 2 つの研究が報告されている。研究 4-1 で、大学生および大学院生 169 名を対象として記憶の情報源判断と関連する自発脳波の指標について探索的に検討した後、研究 4-2 で、前頭 B ピーク周波数と OI 生起量との関係を調べた。その結果、OI は頭皮上の前頭や中心頭頂部に反映される神経発火閾値が時間を通して低いことと関連しており、ノイズの影響を受けた神経活動が多い状態では記憶における行為主体の混同である OI が生じやすいことが示唆された。

第 6 章では、以上の知見を総合し、行為への注意、行為スキーマの活性化、脳内で生じる運動シミュレーション、および自発脳波に反映される個人特性が OI の生起にどのように関与するかについて考察し、OI の生起過程に関する仮説を提案している。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

(1) 他者行為の観察による行為の虚記憶（OI）について、行為を観察・記録する段階における複数の要因の影響を要因同士の関係も考慮して検討し、OI の生起過程を行動レベルおよび脳の活動レベルで記述した。

(2) OI の個人差の指標として、従来の研究では全く用いられてこなかった自発脳波を導入し、その有効性を示した。(1) と併せて、今後の OI 研究の方向性や新しいアプローチの可能性を示したといえる。

(3) OI に影響する要因を明確にしたことで、実演効果として知られるような学習時の運動要素の処理が記憶に及ぼす影響や、記憶における運動の役割について詳細に検討する手がかりを提供した。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3 年 2 月 4 日